【200】

氏　名(本　籍)	清水重勇(東京都)
学位の種類	博　士(教育学)
学位記番号	博乙第 1,237 号
学位授与年月日	平成 9 年 1 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	フランス近代体育理論の変遷に関する研究 ーアモロスからクーベルタンへー

主　査	筑波大学教授		白石晃一
副　査	筑波大学教授	教育学博士	山本恒夫
副　査	筑波大学教授	博士(教育学)	山内芳文
副　査	筑波大学教授	教育学博士	片岡暁夫
副　査	筑波大学教授		阿部生雄

論文の内容の要旨

1．論文の構成

清水重勇氏提出の「フランス近代体育理論の変遷に関する研究ーアモロスからクーベルタンへー」という題目の論文は，序論，序章，第1章～第5章，終章および付録から成り，本文692ページ，付録部分（註，文献目録，年表，人名索引および巻末資料）102ページ，合計794ページ（1ページ当たり1,200字。400字詰原稿用紙で合計約2382枚に相当する）となっている。

2．論文の内容

本論文で著者は，19世紀初頭の体育理論家アモロス（Amoros，1770－1848）から19世紀初頭のスポーツ教育学者ピエール・ド・クーベルタン（1863－1937）に至るフランス近代体育理論を，その変遷過程をたどり，編年史的に叙述している。その中で，特に，その最終局面にみられるクーベルタンのスポーツ教育学（pédagogie sportive）に注目し，従来，オリンピック運動の中でのみ伝承されてきたクーベルタンの業績評価を再検討し，彼の改革運動の根本思想と彼のスポーツ教育学理論の歴史的意義を解明している。そして，ジムナスティーク，スポーツ，体育（gymnastique, sport, éducation physique）という主要概念の歴史的関連と相違を明確化させている。また具体的な理論内容の比較検討のために，運動記述の分析という手法を用いている。

論文の構成と概要は次のとおりである。

序論では，研究目的と研究方法と基本資料について説明し，この分野の先行研究の批判的検討をふまえて，研究課題を整理している。

序章では，クーベルタンの思想を形成したフランスの教育とフランス近代体育の特徴および理論的課題を解明する前提ともなる，「身体的なものの教育」という概念の登場過程と近世的な技芸体系としてのジムナスティークの成立と変容の過程を概観している。これによって，スポーツの教育学的淵源を探究しているのである。

第1章「近代的ジムナスティークの成立」では，アモロスの主要著作を解題し，彼の理論的課題を明らかにするとともに，彼が近世的ジムナスティーク概念に代わる近代的ジムナスティーク教育学の概念を成立させた過程について論述している。これによって，アモロスの体育史上の評価を再検討し，アモロスの活動を国民体育運動として体育史上に位置づけている。

第2章「ジムナスティークとスポーツ」では，アモロス以後19世紀後半期のフランス近代体育の変遷および19世紀中期のスポーツについて論述している。第1節では，アモロスの後継者たちによる学校ジムナスティーク科の成立と展開について概説し，それが軍事化するありさまを描写し，第2節では，軍隊ジムナスティークや学校ジムナスティークとは異なる市民ジムナスティークの成立と展開について概説し，それが学校ジムナスティークの組織化と平行して，フランス的地方分権の性格を残しながら愛国的傾向をたどったことを叙述し，第3節では，雑誌記事の分析によって，フランスにおける用語としてのスポーツの登場とスポーツ概念の変遷とをジムナスティークとの歴史的関連性において究明している。ジムナスティーク活動に含まれるアスレティシズム（競技性）の検討をとおして，クーベルタンがスポーツによる教育の刷新を企てる以前のフランス語スポーツ（le sport）の概念を解明しているのである。

第3章「体育とスポーツ」では，19世紀末約20年間のジムナスティーク，スポーツ，体育の変容過程を明らかにしている。アモロス的なジムナスティーク教育の理論が衛生学・身体運動学・運動生理学などの学問的研究成果に裏付けられ，姿を変えてフランス学校教育制度の中に位置づけられていく状況を，文教政策との関連で説明し，1880年代のジムナスティークから体育への名称変更に，スポーツ競技の教育的側面への着目とスポーツの教育の場への位置づけの動きがあることを見出している。

第4章「スポーツ教育学の土壌」では，今日に至るクーベルタン研究の世界的動向を概観し，クーベルタンの比較教育学的思考と彼のスポーツによる中等教育改革の実践運動について論述している。ここでは，最新の発掘史料に基づき，最新の研究成果をふまえて，クーベルタンの思想形成におけるイギリス的教育の発見（アングロマニア）とルプレ学派・社会科学派の影響が詳述され，イギリス・スポーツの影響下に発展するフランス・スポーツ界の状況に関わるクーベルタンの活動（教育行政への働きかけを含む活動）がオリンピック競技会復興の直接的動機との関連で説明されている。

第5章「スポーツ教育学の理論構築」では，クーベルタンにおけるスポーツ教育学の構想の展開と著書『スポーツ教育学』（1922年）における理論体系化とについて，その成立過程から「ネオ・オリンピズム」概念へのスポーツ教育学の融合に至るまでを詳細に論述している。これがこの論文の中心部である。序節では，論文『21年間のキャンペーン』の文脈を分析することにより，クーベルタンが1908年までにすでに，フランス教育学を「スポーツ的なもの」によって改革しようとする構想を持っていたことを明らかにしている。

第1節では，著書『公教育ノート』（1901年）と論文『モデル校レオポルド2世コレージュ』（1912年）におけるクーベルタンの教育学改革の言説を分析し，それが文明史の視点からの改革論であり，そこから彼が「スポーツ本能」という独自の概念を導き出していることを明らかにしている。この時点で，彼によって，スポーツが教育学の中に重要な柱として位置づけられ，スポーツ教育学が成人教育，大衆教育にまで拡大されているのを見ているのである。

第2節では，彼の「実用的ジムナスティーク」の理論を検討し，そこに見られる「筋肉の記憶」という心理学的動作分析の概念に注目して，19世紀末のジムナスティーク改革を超越する新体育理論として，これを評価している。

第3節では，クーベルタンのスポーツ心理の探究について論述し，彼の心理的記述法の意義，スポーツにおける恐怖心の分析研究にもとづくスポーツ的性格から道徳性への転移の可能性の模索，彼のスポーツ分類概念を検討している。

第4節では，クーベルタンのスポーツ文明史を検討し，ここに自国ジムナスティーク史としての近代国民体育史を世界体育史の叙述に転回させる画期的なスポーツ文明史観を見出している。

第5節では，第5章第1節から第4節までの叙述を総括して，クーベルタンの教育課程改造論，成人教育論，スポーツ文明史，スポーツ心理の探究などの諸理論がクーベルタンのスポーツ教育学を構成していると結論している。

終章「スポーツ教育学の歴史的意義」は，論文全体のまとめとなっている。ここにおいて著者は，編年史的叙述を近世的技芸観の崩壊から近代的競技観・近代的知識観の成立への過程として整理し，体育理論史・教育理論史におけるクーベルタンの意義と教育改革運動としてのスポーツ教育学の意義について考察し，最後にクーベルタンのスポーツ教育学の今日のわれわれに残した課題についても考察している。

審査の結果の要旨

本論文は，フランス近代体育の理論史の研究として優れた著作である。また近代教育理論史の研究への貢献も大きい。特に，アモロスの著作の綿密な分析検討をとおして，彼における「スポーツ競技の観念」の存在を確認したことと彼の活動を国民体育運動として体育史上に位置づけたことと，クーベルタンのスポーツ教育学の解明とその体育理論史上・教育理論史上への位置づけとは，この論文のすばらしい成果である。また，著者によるフランス体育関係文献の集成・解題は日本の西洋近代体育史研究の文献学分野への貴重な貢献といってよい。

著者によるフランス近代体育史の完成が期待される。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。